

第2問 次の文章を読み、以下の問1と問2に答えなさい。

1980年代以降、欧米を中心に「感覚史」という研究分野が提唱され、感覚は研究対象の一つとして歴史学者や人類学者らから注目を集め始めた。五感を歴史的に捉えることは、人々が生きる環境がどのように変化してきたのか、そしてその環境の変化を人々がどのように認識し理解していたのかを考えることである。

つまり感覚の歴史は、存在論および認識論と深く関わる問題である。身体は物理的なモノとして在るだけでなく、文化的なものでもあり、その物理的・文化的構築物としての身体を通して人々は周辺環境を認識するのだ。

「景色」という語は、「景色を見る」のようにしばしば視覚と結び付けられるが、実際には、その場所を訪れる場合には、見るだけでなく、音や匂い、空気感のようなものを感じ取るし、写真など視覚メディアを通してその景色を見る場合であっても、その場の音や匂いなどが自然と想像されることもあるのではないだろうか。（中略）

では、人々の感覚体験・感覚世界はどのように変化してきたのだろうか。まず、産業化や工業化、都市化が急速に進んだ19世紀末から20世紀初頭の米国を例に考えてみたい。ヴァルター・ベンヤミンは、交通網の発達や工業化による社会変化を近代化による「ショック」体験だと捉えているが、まさにこの時期は、特に都市部における生活環境・生活様式の変化が人々にとって心身的「ショック」を与えるものだったともいえる。

それは普段の食生活一味覚体験も例外ではない。1870年代以降、大量生産時代をいち早く迎えた米国では、急速な工業化と市場の拡大に伴い、農業生産者や食品加工業者らは、効率性や標準化に重点を置いた生産の合理化を図ろうとした。

これにより、時季や産地に依らず色や味が規格化された食品の生産が必要となった。そして、トマトやリンゴなどの野菜や果物から、缶詰やマーガリンなど加工食品にいたるまで、どこで購入しても、同じ色、同じ味のものが作られ、食べられるようになったのだ。

たとえば米国フロリダ州のオレンジ。同州で栽培されていた一部の品種は、温暖な気候のため、皮の色がオレンジ色に変化しないまま、身だけが熟することがある。フロリダの生産者らは、緑色の「完熟」オレンジは、たとえ中身が熟していても全国市場では売れないと考え、1930年代初め、合成着色料を用いてオレンジの皮を着色するようになった。

つまり消費者が期待する味、または消費者が求めているだろうと生産者が考える味に「合致」する色を作ろうとしたのである。だが果物に着色をすることは自分たちを欺く行為だと考えた消費者からは抗議が殺到した。

ここで興味深いのは、多くの消費者が、熟したオレンジの「自然な」色はオレンジ色であるべきだと考えていたことである。この場合、実際には、緑色の方が熟したオレンジの「自然な（人工的に手を加えていない）」色であるにもかかわらずだ。

いつでも、どこでも、画一化された食品が市場に出回るようになったことで、多くの人々が共有する「あるべき」色という認識が次第に構築されていくと同時に、そうした認識は、翻って生産者らが予測可能で画一的な色を作るための更なる動機づけとなったといえる。（中略）

米国で食をめぐる視覚・味覚環境が大きく変化した20世紀初頭は、日本でも新たな感覚世界が生まれた時期である。それは、19世紀末以降の資本主義社会の拡大が米国のそれとは違う意味を持ち、また異なる形で立ち現れたといえるかもしれない。

明治末から昭和初期は、新しいフードスケープ（食を取り巻く空間・環境）が誕生した時代である。コロッケやトンカツなど当時では珍しかった洋風の料理が広まり始めるとともに、新たな外食文化も生まれた。1902年（明治35年）には調剤薬局として創業した資生堂薬局（現 資生堂）が、アイスクリームやソーダ水の製造・販売を行うソーダファウンテンを店内に開設し、後の「資生堂パーラー」に発展した。白木屋や三越など老舗デパートが食堂を開設したのもこの頃である。

一般庶民には依然として高嶺の花ではあったものの、西洋料理がレストランで提供されたり、雑誌で取り上げられたりすることで、次第に多くの日本人が西洋的な料理を見たり、食べたりし、「近代化」を感覚的に体験していたともいえるだろう。（中略）

大量生産時代の視覚の画一化にせよ、近代化による感覚体験の西洋化にせよ、これらは一見すると、資本主義システムの拡大により人間が「本来」持っていた豊かな感覚が単調になってしまったり、日本「本来」の感覚が西洋的なものに置き換わってしまったようにも見える。だが、歴史を通して人間の感覚は変化してきたのであり、「本質」や「本来あるべき」ものとは、連綿と続く歴史の中で作られるものではないだろうか。

このことは、人々が感じ取る感覚、そしてそこから生まれるある種の価値観や認識は、社会的コンテクストの中で読み取る必要があることを意味している。

（久野愛「感じる歴史」『世界思想』50号、世界思想社、2023年より作成）

問1 近代的な感覚世界の特徴とは何か、簡潔に答えなさい。

問2 現代の日本で、食の感覚は近代と比べてどのように変化しているか、具体例をあげ、400字以上600字以内で述べなさい。